明治の女子

明治四十一年三月十五日發行
明治三十[illegible]年五月七日第三種郵便物認可

是故に我等召されてキリストの使者となれり。我等キリストに代りて汝等が神に和がんことを爾曹に希ふ。
哥林多後書五ノ二十

明治の女子 第五卷參號 彌生號 目次

論說
○瑞花錄……川副櫻書

名家訪問
○ヘレン、ケール孃に就て……津田梅子

雜纂
○水の姫君（承前）……辻村靖子
○春鶯に寄せて……加奈子
○ヘルム氏演說の大要……飯田市平
○紫式部の理想の女性……秋　郎
○さまよへる聖者（承前）……櫻　齋　生

女子青年會記事
會員諸姉に申上候○女子學院○大阪ウヰルミナ女學校○橫濱共立女學校○名古屋女子青年會報告

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子

「明治の女子」は日本基督教女子青年會中央委員が發行する機關雑誌也。

「明治の女子」は一年分郵税共金五拾錢一部郵税共金五錢とす。

日本基督教女子青年會は青年女子の衛生、社交、智識、靈性上の發達を計るための團體也。

日本基督教女子青年會中央委員左の如し。

委員長　エム、エ、ホイツトマン

副委員長　岡見惠子

記録書記　エ、ジー、ルイス

會計　フィシヤー

萬國基督教女子青年會同盟委員　河井道子

萬國學生基督教同盟會委員　宮川すみ子

東京在住委員

津田梅子　渡部瀧子

エビー、ウエスト　井上友子

平野濱子　鈴木欣子

中島小春　井深花子

地方在住委員

大坂　ケー、ツリスツラム　京都　松田道子

京都　シ、エス、フエルプス　仙臺　エル、ザフルー

名古屋　イ、エム、ソーベル　廣島　エヌ、ジー、ゲインス

日本女子基督教青年會幹事　エー、シー、マクドナルド

同副幹事　エス、シー、フキツシヤー

明治四十一年三月十三日印刷

明治四十一年三月十五日發行

東京市麹町區土手三番町十五番地

編輯兼發行人　エー、シー、マクドナルド

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷人　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所　三秀舍

日本基督教女子青年會の事に付き御尋ねの節は東京麹町區土手三番町十五番地同會事務所宛にし御尋相成度候

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

神を愛せよ

明治のをさな子
第五巻第三 彌生號
明治四十一年三月十五日發行

爰に一個の教法師あり、起て彼を試み云ひけるは、師吾れ何を爲ば永生を受べきや、イエス曰けるは律法に記(おさて)されしは何ぞ。爾如何に讀か。答へて曰けるは、爾心を盡し精神を盡し力を盡し意(こゝろばせ)を盡して主なる爾の神を愛すべし。又己れの如く隣人を愛すべし。

〔路加第十章二五―二七〕

愛神と愛人とは其の實決して別種のものに非ず。人を愛せずして神を愛し、神に愛せられずして人に愛せらるゝが如きは是慥かに不可解のこと無意義のこと也。神を愛するの心は所詮は人を愛するの念慮によりて始めて確實顯然たるものに非ずや。

由來、神は親しむへくして決して懼る可きものに非ず。神は吾人の父、天地自然の母たる也。眞の愛には秘密なきが如く、最も圓滿至高の愛には一點恐怖の影を許さず。嗟呼、神を愛するは是れ人を愛するの人、眞に人を愛するの念慮は、やがて之神を愛するの至情に非ずや。

故に曰く、「爾の心を盡して主なる神を愛し、又己の如く爾の隣人を愛せよ」と。

人を愛せよ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嚆花錄

櫻喬生

一

「春は三月櫻花」、無心の花も美を飾るべき時季はちやんと造化の大御神に依て定められて居る。淀の川瀬の夢淡く四方の山々ほんのりと薄煙り立ち上るところ、天上の粋とも云ふべき萬朶の花が清らかに咲き出る頃は、下界も暫しは美意識の滿ち滿つる時である。凩凄く襲い來て室内に籠ぢてもつた欝々の念も、そよふく東風に和けれて幾分か發動しようといふさなか、紅白淡紫の色彩美が眼先きに廣く展開せらるゝので、此處に人間の美意識は自然と發露せらるゝのである。

梅や水仙などは、どちらかといふと淡清な俳的趣味が多いやうに思はれる。この嚴かな淡い姿が、時もあらうに能くもまあ野分鋭き冬枯れの蕭殺落寞の中に生ひ出てゝ、旨く四圍の景色と合體したものである。冬は矢張り淡白な地味な白の世界である。藤や菖蒲、牡丹、躑躅なども皆夫々時節と性質とが旨く合體調和して其の間一寸の粗漏もないので、美しい色彩美の感情を享受することが出來るのである。だが一つ珍らしいコンッラストをなしているのは、彼の聖書が『ソロモン大王が榮華の極みの時だにも、其の裝ひ此の花の一つにも及ばざりき』と喝破した谷間に清き白百合の花である。

夏は如何觀ても綠青深紅の調子に富んだ、云はゞごみらしい季節のやうに思はれる。此の濃厚な如何にも形式の勝つた夏の日に、雪を欺く一莖の白百合が谿谷深く塵をさけて靜かに清風を樂んで居る樣は、如何觀ても造化の玄妙深秘な靈能としか思はれぬ。概して事

物は恒に時と人とに順應するものであるが、往々之を逆にして却て無限無量の感想を惹起することがある。

例へばだ。あの無趣味な理屈一天張りの科學者達が例の理論から割り出して「風は何處より來つて何處に行く」といふやうな質問をだしたとしても、吾等は別にあやしい思ひも珍らしい考も起らぬのみか、寧ろ科學者といふ職掌に對して忠實な至當な疑問だとしか思へない。だが今一歩地位を轉倒して、あの無邪氣な神樣のやうなあどけない小供が、何心なく慈母の膝下に甘つたれながら「母チャンあの冷めつたい風は何處からくるの！」といつたとしたら如何だらう。苟も人間としての感情を有つているものなら、この刹那一種美妙な一種特謌な無限の詩美に打たれて、すゞろに人生の不可思識な深秘な感想を思ひ浮べるであらう。

これは地位を轉倒して起る美的興感の一例であるが、然し眞に美意識といふ者は、主に内容形式の調和融合に依て起つて來るのである。卽ち古代グリースに於て研究せられ、英のハッガードや獨乙のバウムガルテンなどに依て唱導せられた變化統一の説は之である。世には隨分と外形美にして内容の醜なるもの、内容美にして外形は存外拙なるものが多いのだが、何れかといふと内容の勝つた方が一種の深遠雅致を與ふるやうに思はれる。よしんば、軒は落ち柱は傾き籬や門戸は破れ朽ちても、庭のあたりなどの一面に淸らかな、室内諸調具の整然たる、家のあるじのなまめかしき樣に接しては、一種幽嚴美妙な深い／＼淡淸の詩趣を禁するを得ないのである。之と反對に新築朱塗の大家も、一度戸を排して諸具の雜然とした一家の無風流な樣をみては滿身の厭氣を禁することは出來まい。

二

生は以上不十分ながらも地上美の最も純白なものとして、フロラの表現たる花弁の美をあげてきたのだか此に今一つ神美純潔な愛の源泉が下界に深く潜でゐることを思はねばならぬ。其は云ふ迄もなく神の愛を一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

身に集めた幼兒なのだ。僕はいつもそう思ふのだが、小供ほど貴い美しいものがこの世にあるだらうか、人は小供と老人程家で厄介な者はないと云ふが、僕は這麽人に向つては、今少しハートを和らげて宇宙自然の心髓に接せよと勸めてやりたい。勿論小供はだゞをこね徒らの限りを試み、時には隨分と泣きもし、あまえもし、お喋りもやるのだが、之を以て直樣小供を厄介視するのは沒趣味も亦甚だしいもので、其處に却て愛らしい捨てがたい一味の美點があるのを知らないのだ。

　それに亦、小供の死生觀宗敎觀など云ふものが妙に人の心のどんぞこを穿つて居るやうて唯感嘆するより外はない。勿論其等は極々單純て卑近なものてはあるが、然も其の中に一種いふべからざる無限無量の意味を語つてゐる。心理小說家として人も許し自らも許してゐる露伴子などの作物には、能くこの妙味が現はれてゐるやうに思ふ。たしか天打浪の第一巻の中程だと覺えて居るが次のやうな一節がある。

小さき剣盆に大なる茶碗をのせて嫣然と持ち出てたるお濱は水野が膝近く其れを置いて、おのれは祖父の傍に甘へるやうにすわり、
「昨夜は怖かつたてしようね、貴郎て！　あれから、妾床に入つたら先生（水野）のいらしつた方の遠くの遠くから駒のなく聲がきこえてきて、ほんとに淋しかつたわ……」

深夜人靜まつた暗闇に一少女お濱は、すゞろに人間眞味の寂寞を感したのである。一意流露の言葉だが、よく人間刹那の深い底ひなき感想を表はして眞情の琴線をかきならす思ひがある。蘆花子の作、「黒潮」の中にも是と略同様の意味が洩らしてあるが、一篇の趣向が悲劇に出來てるだけ其れだけ深く讀者の感想を動かすやうに思はれる、

邸内には眼下ばかり、眼下の中には誰一人馴みになるものもない。佐々倉の伯母様は好きな伯母様てはあれど、今の場合行きたくない心地もする。所謂我泣く膝は天地間に唯一ツ、母上様の膝懸しい母上、なつかしい母上、嗚淋しくつて私のやうに泣いておいてなさるだらう。わたしも行つて泣かう。沼津、沼津！道子はかくて淺草へ廻つたお隅等が日暮方になつて歸つた混雑な機會に厩をはいて、そつと邸をぬけだした。……」

母思ひの道子が父伯爵に生木を割くやうに無理に隔てられて、さらでも弱き少女のかなしさ、いひがたき恐

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

慘の境遇にありながら一味母よりうけゑた犯しがたい强味を示してゐる所は、宗教の强い助けによりすがつて光明の界を期待してゐる一標象ではあるまいか。
又小供の死生觀に就ては英の桂冠詩人ヲーヅヲースの「我等七人」がよく之を代表してゐる。彼は其の卷頭に小供が如何して死生の觀念を有つことが出來やうぞと筆を起して居るが、他の一面に於ては又實に美しい的確な幼兒の死生觀を洩らして居るのである。

世には隨分と靈魂の不滅說を信じきれない人も多いやうだか、這麽人は先づさしあたり天眞流露な幼兒の前に跪いて其が天來の死生觀を拜聽するが宜い。改めて云つて置くが小供は飽くまでも神の人格化したるもので、其が體内至るところには優しい淸らかな神の面影を宿してゐるのである、だから小供を欺かうとするのは神を欺かうとするのも同樣で自ら顧みて大に愼まなければならぬ。

兎に角人間は成人すると同時に熬じ虛僞と罪惡とを兼ねるものである。心と行との一致は小供に於て最も著しい特點である。だから小供は正確な直覺力を有して來るやうに思へる。いくら御世辭や愛媚などを振り蒔いたつて、如何程外面の體裁を作らうとしたつて、あの神樣の恩寵を一身に集めた美しい透き通つた小供の眼には其の人の本性のみが奇麗に流露に映り出るのである、小供は容易に欺けるものでない。又決して包みかくしの出來るものでもない。心行一致の標本は廣いこの下界の中で、たゞこの小供に於てのみ觀ることが出來ると思ふ。だが、悲しいかな、其の直覺の力が鋭敏でないことだけは如何しても否定することは出來ぬ。

三

この直覺力の鋭敏な一事に於ては恐らく一般女性程優れて發達したものはあるまい。あの優しい美しい女の眼は、一種異樣に耀いて人事を直覺する上に於ては驚く程精緻な微妙な働きを有して居る。さればとて、一般女性が心行一致の實をあげてゐやうとは受取れぬや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うだ。幾何學ではないが、よし心と行との一致が自然直覺の力を產み出すとしても其の逆は必ずしも眞だとは認めかねるのである。

婦人が如何に直覺力に富て居るとしても、元々種々な弱點を有つて居る人間だ者、決して誤りのないといふ筈はない。否隨分誤りはある。事實として幾らもある。が然しだ、初めて顏を向き合した時や、談話の折りなど只有りの儘に、齒に衣きせぬ底の露骨に先方の氣質や性僻などを見て取るのは決して容易ならぬ事である。そして往々直觀に依て得たる性行氣質が其の肯綮を得て全豹を見極めることがあるから愈以て妙だ。

淺間しい話ではあるが人間は如何にかして人を魅せようとする努力が大概の人には附隨して居るやうに思はれる。貧しいよりか富んだ方が宜い。馬鹿に生れるよりか悧恰な人物に生れてみたい。誰だつて左樣だ。苟も人間といふ名稱を備へている以上はかうあるべきが至當なので、亦然かあつて欲しいものだ。然し實際は不如意勝な貧賤な境遇にありながら何の必要があつて似もつかぬ富を假裝するのであらうか。馬鹿な人が悧恰な振りをしても何の有難味があらう。猿は衣冠を飾つたつても矢張り猿だ。貧は貧、凡俗は何處迄も凡俗其所に又一味捨てがたい特質がありはせぬか。要するに事物は內外相一致融合することに依て始めて眞の美を發揮する者である。

（四）

虛僞は如何考へてみても罪惡である。人を欺き天を欺く之れ天下の大罪である、殺人以上の罪惡である、然し誰も能く經驗するやうに時と場所、人とに依つては欺き僞はることが全然罪過とならぬ場合がある。否却て人に喜ばれ自分も滿足するとがいくらもある。宜い適例が醫師と患者との關係である。肺結核や胃癌の人に向て初診早々、事實を有りの儘に知らしたら其の患者は何の位失望するであらう。何の位ゐ悲慘の境遇に沈むであらう、若し其の患者が多神經的ヒステリー質の婦人てゝもあつたら、其の醫師は初診の一言

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て以て死を宣告するやうなもの、孝經の語を借りて云へば、醫師は事實上殺人の罪を犯したものとなるのだ。此の他社會上ありとあらゆる事實は、時と場所に應じて虚言することを罪だとは思はぬ。否社交上の一要件として之を要求するのである。

此の如く人を欺くことは社交上或は必要な一要件かも知れぬ。が、此處に一つ絶對に罪となる虚僞がある。其は自らを欺くこと、謂ひ換ふれば自己の良心に向て虚僞を働くことである。此の一事は洋の東西、時の古今、如何樣な場所、如何樣な場合に於ても善となることは斷してないのである。天を欺き自己を欺く、世に是程大なる罪があらうか。一體良心なるものは絶對に善なるものである。少くとも其人自身にとりては行爲の標準是非の法度として絶對に信頼すべきものである。人間固有の明鏡である。知が進み、感情が錬れて人格が高まれば高まる程其の明るさを增してくる。この鏡だに清澄なら如何に神の存在を否定しようと勉めても宇宙自然の本體は自ずと現はれて來るので、この增澄の鏡を通して全知全能の大御神を眼のあたりに拜することは易々たるものと信ずる。

所が實際に於ける吾人の行爲は此の明鏡を曇らせ汚さうとする方向に進むことが多い。吾人は今過去二十餘年の生涯をふり返つただけでも隨分穩かならぬ考へも起し、行爲も經過して來たやうに思ふ。此の上如何程罪を重ねるかと思へば我ながら人間といふものが存外強いやうに見えても薄弱なるものと觀せざるを得ない。之れ所詮は感情の修錬が幼稚で、信仰の念慮が缺乏して居る爲とは云へ、返すも〳〵淺間しい次第ではないか。

五

『人とは何だ！』『感情にもろいもの』、是が吾等凡人の常狀である。『もろい』といふ『感情』は未だ〳〵幼稚な不純不透明な者で、『感情即眞理』の妙味にはいつて始めて人格の完成を告くるのである。かう云へば、感情は眞理や理性などの從屬みたいなやうにも聞ゆる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、吾輩の本意は決してさうぢやない。たゞ感情といふ純にして美なる一谿の泉が、眞理の河床を滑らかに一點のよどみもなく流れ得るやうになれば、其處に人格の完成感情の純美を認め得るといふのである。源(みなもと)清き折角の清泉が、濁波蕩々として黄河の觀を呈するに至ては誠に情けない話で、罪はおのづと其の人自身に歸着するのだ。如上の妙味はあながち人間として神境の地を踏まなくても恐らく達し得らるゝ境涯のやうに思へるが如何でしよう。

名家訪問

ヘレン、グール孃に就て

津田梅子女史談

三月四日朝來降りしきる雪の花繽紛として午後には風さへ强き吹雪となつた。此の日午後三時とも思しき頃雪には縁しの深い津田梅子女史を麴町五番町なる邸宅に訪ふて案内を乞ふと、直様和洋折衷の應接室に導かれた。て來意を告げて親しくグール孃に關する約一時間餘の物語を聞くことを得た。本篇は當時高話の大要て一應校正を經たものである。尙當日愉快に本誌の爲に談話せられし女史の厚意を深謝すると同時に特に進て紹介の任に當り給ひしミス、マクドナルドの勞を多謝す。…………（一記者）

銀波湧き立つホドソンの河畔彼のスケッチブックを以て有名なるヲシントンアーヴヰングの舊家を去ること十四五町、鬱乎と茂つた林地の一角魏然たる一構への邸宅が建つて居る。之れぞ亞米利加屈指の慈善家として普く合衆國民に知られたるヘレンミラーグールHelen miller Gonld孃が住居てある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

グール孃は年齡四十前後の婦人て、家に數十萬の富を貯へ、悠々として慈善事業の清風を味つて居られる。彼のブルークリン Brooklyn の青年會を始め其他汎百の慈善事業の中、孃の力に依て經營せられざるものは殆ど少ない位であります。父は生前幾十百の富を作られましたけれども其方法手段が如何にも面白くありませなんだ爲に、いたく世人の批難を受けておられましたが、孃の事業と心事とは優に此の世俗批難の霧を掃ひ父君の身邊を淸めて餘りあるものと存じます。邸內には三人の專任書記が居りまして一切の事務に當つて居ますが、日々受信せらるゝ信書の數が三百通以上に達すると申します。其の如何に世人の注視を引き一般貧民に尊重依囑せられつゝあるかは大抵想像せらるゝことと信じます。

孃や身邊巨大の富を重ね大厦の奧に起居せられて居るが、敢て虛飾浮華を好まず、極めて質純簡素な生活をして居られるのであります、であまりに華美を盡した集會や社交などは孃の好まざる所で、唯自己の經營する裁縫學校や敎會などに立て日夜貧民を導き、無學者を敎ふるを以て唯一の樂しみとして居られるのであります。

是れに就て思ひ出しましたことは、曾て孃が自身で書記の一人に物語られた一話であります。或る朝のこと紐育イーストサイドの貧しい一婦人よりして一通の信書が參りました。其手紙の大要はこうなのです。今自分は產蓐に就いて起居も儘ならぬ有樣、其れに良人が病魔の爲に職業を失つている。噫將に生れんとする嬰兒！おゝ最愛の幼兒は如何にして其が生命の紐を繫くべきか、仰ぎ願くば一臂の御力を貸し給へ……と水莖の跡さら／＼と誠を盡し情を込めて書き流してあります。孃は此の一書を手にしていたく不憫に思ひ、此の種の悲劇はよく貧しき家庭にあり勝のことで別に怪しむべき筋もないので、早速其友たることを承認して美しい嬰兒の服一着と多少の金圓とを添へて可憐の產婦に惠むことを書記に命ぜられました。書記は尋常の者なら大抵一應探索をして實地を取り調べた上て物品を

贈與するのが慣例でありますが、此日に限つて何かと事務が繁忙を極めて居る。そうかと申して時日を延ばして居るわけには參りませんので、郵便に托して例の物品を郵送してしまいました。すると翌朝如何にも丁寧な謝禮の手紙が着いて、深く其の恩惠を謝し終りに「子供は無事に生成して居るが不幸にも雙兒が生れましたので吾等の責任も亦一倍と增加したやうに思ひます……」と暗に身の不遇と今の窮狀とを訴へて參りましたので孃は再び書記に命し今一着の新衣を作らして、其の可憐の一家を見舞ふやうに命ぜられたのであります、で書記の一人は自ら差出人の住所番地を尋ねて小暗き四階の一室を叩きますと「オハインナサイ」と男の聲がする。で靜かに戶を押して內には入つて見ると此はそも如何に！產蓐の婦人も居なければ可憐の幼兒も見えない。唯室の一隅古びたテーブルの上に半ば飮み殘したウヰスキーの瓶が横はつている。生れ落ちた雙兒と云つたのは眞赤の詐りで、老人二人が盛に酒を飮むで居るのでした。書記は驚いて早々此の室を辭し去つたそうであります。

此等はちと滑稽なお伽噺にでもありそうなお話しですが、孃の名前を慕ふて日に日に三百有餘の紙面が舞ひ込んで、やれ何々會の寄附金だとか何々の慈善會だとか云つて其の輔助救護を求むるものは引きもきらぬ有樣であります。のみならず面白い事には田間僻地の未見な所からして「一女兒を分娩しましたので此兒の將來を祝する爲にヘレングールの名前を附けました……」など云つて幼兒の寫眞や丁寧な挨拶などを送り越す人も少なくはないそうであります。嗟呼身は可弱き一個の女性に生れながら、斯くも献身的に斯くも誠實に一意貧者の友として慈善事業に投せらるゝ孃の如きは、如何に私共の則とし鑑とすべき所ではありませんか。

グール孃は目下 Dutcle Reformed Church の一員でありますが、嘗ては一時救世軍の事業に多大の與感を寄せて多額の金圓を寄贈せられたこともあります。聖書には非常に熱誠で又精通せる一人でありましよう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

冬期などは一週毎日のやうに講壇に立て熱心に講義をせられまするし時には一日に數ヶ所の會合に出席講演せらるゝ程であります。愛讀の書は主に神仙物語の類て其の書齋には此の種の本が渦高く列べてあります。

此の如く孃は一面巨萬の富を以て意の儘に貧者の友となり慈善事業に一身を捧げて居られますけれとも、少しも倣慢不遜な態度などはありませぬ。至て溫和な謙遜な優しい方であります。嘗て日本に永らく傳導の爲に參つて居られましたミス、ベーコンと云ふ方が或る演說の時に、盛にグール孃の人物を稱讚して其の事業の如何にも神の御心に適ひ世界的博愛的であることを述べて居られました。て私が彼の地に參りまして御面會致しました時分に、Miss Bacon のことを述べて大變に稱讚して居られましたことを話しまするト此の溫和な謙讓な主人公は、

『左樣でございますか。私は未だ其ミスベーコンと云ふ方を存じませんが先方の方も屹度私を直接には御存知ないでしよう。若し私を能く御存知になりましたら、そんなに御賞讚にはなりませんでしたろうに……』

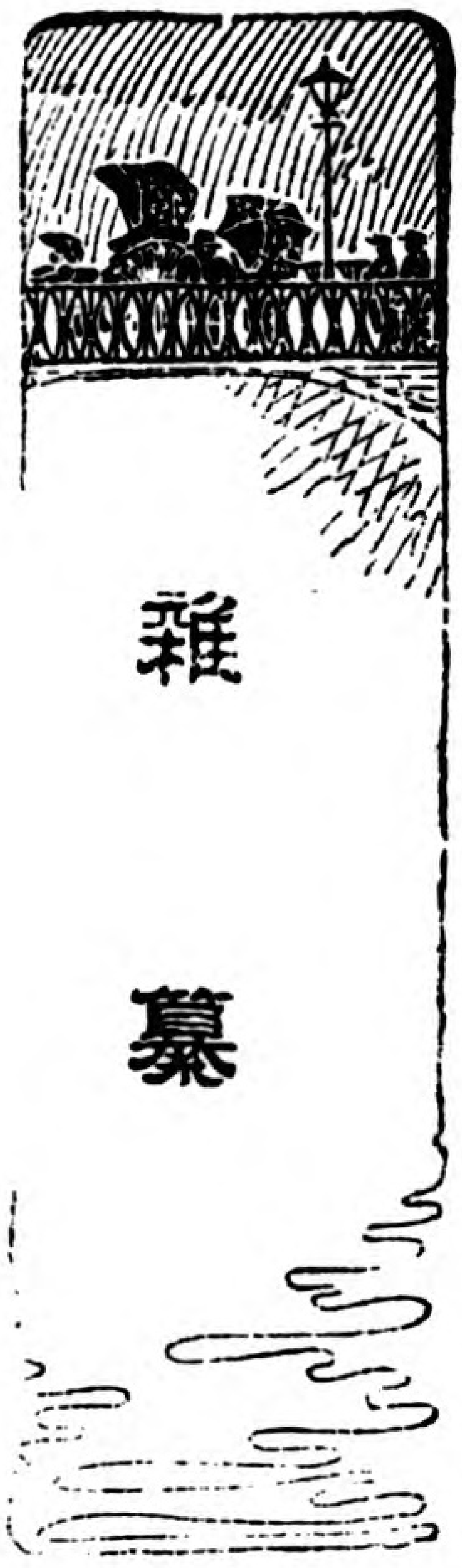
と笑ひながら語られました。何とゆかしい御言葉ではありませぬか。

先に申し述べましたホドソン河畔のリンドホルストの邸宅は、主に夏期のお住居場所で、冬分になりまする と大抵紐育の家て寒中を過ごされるやうであります。宗敎に對しては非常に熱心な同情と信仰とを持たれて靑年會の集會や講演などの折には、喜んで邸內の廣間を貸與せらるゝのであります。リンドホルストの邸宅內には大きな庭園や數奇を凝らした裝飾などがありまして、私などは一通り御宅見物の爲に疲れを感じた程てありました。室內には美事な繪畫が一面に掲げてあるが、之れは皆父君のお讓りもので孃は之れ以上別に新奇な畫面を加へやうともなさらないのです。殊に「バルビゾン」派 Barbison School の人々の筆を煩はしたものが多いやうに思ひます。コロー Corot の者はわけても賞愛せられるやうて、國內の展覽會などには喜て其

の秘藏の繪畫を貸與せられるそうであります。裁縫學校は此の邸宅の裏手の方に立て居りますが、二里三里の道を遠しとせずして集つて參りまする生徒の數が數百に上るそうであります。

御兄弟は慥か四人で御姉樣は佛蘭西の某伯爵に嫁かれ兄樣御二人は親讓りの財產で其の日を過ぐしてをられるそうですが、お父樣に無條件で遺產の分配を受けられたのはグール孃だけだそうであります。

私が御面會致しました時に、是非日本の有樣を…………との御懇望でございましたから、別に腹案などはございませんでしたけれども一通り女子の敎育に就て婦人社會の近況に就てお話しを致しまするとと大變に喜ばれて女子敎育の隆盛を祝し偖「敎育と云ふものは決して學術のみに依賴すべきものではない、どうぞあなたの御經營なすつてお出でになる學校にも是非學術のみではなく品性の上に人格の上に多大の修養をお勸め申します」と呉々もお話しになりました。以て孃が氣品の一般は御推測が參ることゝ存じます。



雜纂

水の姫君（承前）

辻村靖子譯

足音がするので、內からたてつけのわるい戶を具合能くあけて、細い心の洋燈をもつて迎へに出たのは、人のよさゝうな老媼さん、襷かけになつて居るのは、一人で留守をして居つて、今の嵐に雨戶も障子も、みなたてこめて夕餐の仕度最中でした。

「老婆さん、珍らしいお客さんを連れてきただ。道にはくれての、日はくれる、歸る方角も知れない、どうか一晩宿泊て呉れろと云はつしやるだ」

「やれやれ夫はお氣の毒な。こんな汚穢い所だか、まあまあ上つてゆつくらと休まつしやい。」盥に微溫湯を汲んて、泥足をすゝかすやら、すりきれた古だゝ

みの上へ、とつて置きの毛布をしくやらして、老實々しくもてなします。

　客は眞から心うれしく、宛然自分の住居へかへつて祖父さん祖母さんに、右左から勞はられるやうな心もちて、すつかり温湯で身體をふいて、濡れた衣服をきつはりときかへて、そこへすわると熱いお茶を一杯飮んて、やつと人心地かつきました。まあお談話しはあとにして、何にしろ空腹じくて入らしやるだらうと云ふので、老媼さんは何かお臺所て、こせてせしていましたか、ほどなく膳にならべたのは、麥飯ても焚たての温かいのに、三つばのかをりの芬んとする鷄卵の羹汁、ふきの甘煮などがおいしさうにならんてゐました。

　目がまわるほとお腹かすいて居たので、遠慮なくお代りをして澤山たべて、お茶になると、お老媼さんかあと片つけをする、客に懇に挨拶して、程なく、居爐の側に三かなえになつて、中よく談話し初めました。老爺さんと老媼さんとは、もう年久しい馴染のやうに打とけて更に隔てはないのてす。ついに人の來たことのない、片鄙の只一軒の荒屋てすから、どれほと珍しく懷しかつたか知れません。

　てまあ變なことには、この老爺さんか、大森林の談話しをされるのを頻に可厭かつて避けることてした。客は先刻見た怪か、非常に神經にさわつたとみえて、やゝともすると云だしては解決して貰ひたくてならないのてすか、老媼さんまて可厭な顔をして、成たけ談話を外へそらさうとするので、敏捷い性質は直氣かついて、何か之には仔細かあらうか、そんなに人の可厭かることを云ふのはよくないと思つてるので、可怕しかつたこと、怪訝にたえなかつた事も、もう決して口にださぬのです。自分の心一に葬つて仕舞ひました。

初秋の夜てすか、もう更けて燃下つた榾の火も眠そうに消えかゝつた時分、表の戶を小さい拳て、トントントン、トントントンと叩く音かするのてす。客は何ことかと顧瞻たのてすか、主人夫婦はみじろきもしません。すると又先より激しく、ドヽヽドン、ドンド

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ンドンと激しく叩くのです。老媼さんはやつとこさとあみかけた麻を苧桶に入れて、立たうとすると、老爺さんか聲をかけた。

「打やつて置かつしやい彼の悪戯者、今時分かへつて來て、又人を調戯い居る。」

まだ老媼さんか、土間に下りたゝない中に、今度は洵然と音をさせて、水でも汲んできて、打かけたのかのやうに雨戸にあたつた音かして、餘瀝は戸の隙まから、雨洩りのやうに點々と落るのでした。

好人物のお老爺さんも、腹をたてゝ、

「何をする、馬鹿な眞似をすると、家いよせ無いぞ。」

すると老媼さんも、言をそへて、

眞個たよ、おまへ、今時分まで何處に何をしひ居た。今夜は己かお父さあに謝罪つてやるからの、大人しくしては入れ、お客さまもあるに、行儀のわるいことをして笑はれさんな。」

表はしばし靜であつたのですか、仇氣ない聲音て、ゲタケタ笑ひをして、お老媼さんが戸を明けるを待兼たやうに、脱兎の如く跳り入つたのは何物。みれば十五六の少女でした。

片手ては握り切れぬほどな、澤山の髮の毛を無そうさに藁髻て束ねて、手織木綿の短かい衣に、色の褪めたメリンスの帯ですか、どうも目の覺るやうな善い容貌です。

「親父さん　串戯云つてる。お客さんなんかありもしないて」と、つけつけと云ふたのですか、瞥りと客を見て、さすがに少し羞耻しそうに、老媼さんの側へこぢよつて座りました。

兩親とも客の手まへ、あまり小言も云ひません。お老媼さんは冷くなつた茶を、温めやうと火をかきそてせは、お老爺さんは手まめに、魚串を圍爐の椽て削りながら、復よも山の談話しが始まります。

少女はいつか遠慮を忘れて、仲のよい兄さんにても甘へるやうに、じりじりと客のそばへよつてすわりこんて、はては珍らしい時計の金鎖を、指にからんてみたり、ほこしてみたり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「けど貴郎妙ね どうして道に迷つてこゝにいらしつたの？是非彼の森を通過つて來るはつなのに、何かに遇ひはしませんか？」

「馬鹿なことをきくもんぢやない、夫よりか、茶もわいたやうた、ちやつと夕飯を食べてしまへや、よう行儀よくして」。今苦い顔をしながら、お老媼さんはほたほた顔て、膳をとつて引よせるのてすか、少女は耳にもかけぬのてす。

「私御飯なんか食べたくない、夫よりか今のお談話しがきゝたい。」

中々ぢくねて云ふことをきゝません。

客の側にすりよつて膝を搖り動かして、

「ね貴郎、とこからどつちの方へ通過つたのよ、」

「方角はわからないかね、森林の中ちう跋渉ぬ所はないほと迷つて、遂にあの谿河について、やつと里へてゝきたのてす。」

「眞實に？」

「眞實さ、」

「大抵の人は可厭かつて、彼所は通過らないのにどろして通過つて？貴君もし何かに遇ひはしなかつたの？何かしらん遇はずに通過れる筈がない。」

根ほり葉ほり異樣の眼光をしてとひつめます。先刻も云つた通老爺さんは、大森林の談話しと云ふと身戰ひをする程厭可てすのに、少女か忌憚りなく人につけつけときくのを苦々しい顔てきいて居るのてすか、遂たまりかねて聲をかけました。

「えゝもう、小供かそんな談話をきゝたがるものぢやあないは。もう寢る時分たあに、さつさと慈母に寢かして貰へや。

「可厭た慈父さん私可恐い談話しか大好だもの、ね大森林の中をいつて何か見たの？」

客の肩へ手をかけて、顔を窺きこむのてす。油つ氣はないが、つや〳〵とした黒髮か、冷たく男の腕へかゝるのてした。青年は何物にか魅せられて居るかのやうな心持て、思ひだせは今日の出來ことは、また眼の前にちらついて、萬一したら彼の氣味わるかつた倅

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

儒か、またまたあとを追ふて來るのではないかのやうに、幻聽して、戶の外のがたりとする音さへ、其跫音こはないかと耳そばだてるのです。

「好い加減にしろよ、又和女の執拾か初つたゞ。」

今度は老媼さんに窘めらるゝと、少女は眞紅になつて發嗔つたのです。

「私もう可厭だ。こんな家宅に居るのは、私他所へ行つて宿泊つて來る！」

亂暴にも無法にも、身を反へして脫兎のやうに、立さつたのです。客はもう呆れるところか物も云えません。所かこんな行跡は、珍らしくないものと見えて、二人共あまり驚きもせす、顏具合せて只歎息したはかり、

「あゝあゝ、いつまで世話あ燒せるかの　日かな一日遊ひくらして、夜までどこか彷徨きあるいて、揚句のはてかあれだゞ。のう老爺さん、破綻一つ縫ふぢやなし茶碗一つ洗ふぢやあなし、己かの手助けは何にゝしないで、蟬を捕つたり、木登りをしたり、衣服は濡す、髮は拗りこはす。いつになつたら女らしくなるべい」

「老媼さん又始まつたあ、客人の手前もあるに、あんまり愚痴をこぼしなさんな。惡戯あ惡戯よ、性質はあれて極正直たあ、己はあ何のかのと云ひ條、彼女の顏をみるから勞働く氣になる、

いま〳〵しいことも、貧乏生活もすつかり忘れて仕舞ふはさ。和女だつて、よくそう云ふべいが」つまらぬ云ひ合ひをして居ます。

何しろ困つたですなあ、此暗黑いのにしかも雨催しの空だのに、どこへ大體行かれたのです。とうです一ついつて探索ねて來ては、」

憎げに云つても一人女の、どこへいつてどうして眠ると。老人二人の物案しげな愁顏を見て居られぬ。二つには、莟の花のやうな可憐な身體を、荒い夜風に吹かせるのか忍びないやうに思つたので、我から進んで立上つては見たか、草臥はてた双の脛は　物につかまはねば立たれぬやうです。其難義そうな起居をみると老爺、老媼もいくら少女か心配ても、義理ても一人て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はやられぬのです。

ことにこんな、大膽な不思議な暴動は、今宵初つたことでは無いとみえて、もう老爺さんから頻にとめて、

「そう思つてやつて下さるて澤山だ。なあに明日の朝になれあきつと一人で歸て來まさあ。どこへおまへさま行くべいさ。」

とんだ親子喧嘩の側杖を食つてお氣の毒千萬な、もう彼是十二時すぎになつただらう、どうせ今夜は眠られまい、

眠られる者かえ、老媼さん其まあ栗でも茹でゝ、徹夜談話してもするとしやうか。」

夫て老媼さんは枯枝をつまをつて、消えかゝつた爐にくべて吹きつけると、折節さつと夜嵐が吹き入つて今までちよろ〳〵と燻つて居た火は、簀の子の煤も動くほどに勢つよく燃上つて自在竹にかけてある、鑵子も大分微温んで來ました。

やがて香しい番茶をいれて、茹上つた栗をお盆にのせて大きな庖丁で剝ぎながら客へすゝめたり、自分達もたべたり。

年の程から考へても、此老夫婦の子としては、四十に餘つてからの女であらう。只一人ぎりで兄弟もないやうなのは、一人女と云ふので甘かしすぎて、那麼快活すぎた女にしてしまつたのか、何にしてもどちらに似たか、美くしい尤物だ。塵塚にさいた白百合一本、萬一養ひ女ではなからうか、客はこんなにも考へたのです。

（つゞく）

春鶯に寄せて

加奈子

天歡樂の愛にみち
地は平和の香に匂ふ
落花有情の水澄めば
流れも繁き思かな。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雲煙搖曳く森の影
波濤美しき春の海
南廂白屋に筆のせて
想ふもゆかし詩の世界

「鳥の果なく囀るも
空吹く風の一聲も
心にしめて聞く時は
みなたゞならぬものぞかし。」

こゝろ長閑き春のそら
鎭守の森邊とざしたる
雲のあなたか鶯の
聲に無量の慰籍あり。

また寒空の春の日に
覺醒舞鼓の譜を奏て
獨り出でにし鷲の山
高き調ぞ身には泌む。

潺湲ながる花蔭に
玉盤すべる歌の主
天津御聲か地に湧く
囁く愛の眞淸水か。

彼方の森よ梅が枝と
胸こそ知れれ眼には見ず
耳打つ美妙の樂の音は
天に湧きいて地に響く。

世にも稀なる靈の鳥
岩の淸水の底すみて
濁れる世にも濁りなし
人に平和をあらしめよ。

あゝ幸多き春の日を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

潺緩ながる花蔭に
玉盤すべる歌主よ
胸に詩歌をゆるせかし。

夕日も西に落ち行けば
雲井の帳幕おごそかに
人界つゝむ靜けさを
群星は蒼空にほゝと笑む。

（舊稿）

ナシビル學生有志大會に於けるヘルム氏の演說

福田市平

私は今度日本學生有志を代表致しまして暫時當地へ參つた次第であります。就きましては目下彼の極東帝國に於て活動しつゝある英米人百五十名の有志を以て組織せる日本學生團は、此の議長槌（Savel）を議長閣下に呈し、閣下の手を經て本會に贈る事を至大の光榮と在じます。

此の槌の頭は有名なる日本の愛國者にして且つ其の指導者なる新島襄氏の墓畔に在りし木で製らしたのであります。此の間同氏の設立に係る同志社專門學校の一卒業生に會ひましたが、其の人の語る處によれば、新島氏が同志社の校長をして居られた時の學生は悉く氏の熱火の如き辯舌によつて深刻なる感化を崇むつて居るさうであります。又た其の卒業生の方が申しますには、或る日同校で大會合を開いたさうです。當時組合教會中錚々たる牧師や衆議院議員や、東京の或る大新聞の記者など云ふ人々が各懸河の辯を振つた。其等が濟んだ後で新島校長が演壇に現はれて僅か數分間計りの演說をされた。最早や隨分年月も經つ事だし、初めの三人の演說は其の題目さへ忘れて仕舞つたが、新島氏のは一言一句尙ほ耳底に在つて、恰度昨日聽いて來た樣な氣がするとのことである。其の論旨はかうである。「諸君、自分は昨夜「メーラ」の苦き水の喩話を見た

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、其れが自分に今日に適用すべき喩への樣に思はれる。人生の激流は即ち苦き水であつて、諸君は各彼の樹木である。諸君の中には爛熳たる花朶を春風に誇り或は照る計りの紅葉に夕陽を止め、或は枝も撓まに世俗の譽れの果實を結び、苦き流の岸に立ちたいと希ふ人もあらう。然し乍ら苟も諸君にしてキリストの爲めに其の義務を盡さんとの志を有せば、必らず人生の底、苦き水の源に投じ、主の聖名によりて之れを淸め、苦味を去らなければならぬ」兄弟諸君之れを以て吾人の今日の會合に、形骸は死せるも其の魂魄は倘ほキリスト教の大勢力として日本全帝國を風靡せる故新島襄氏の齎らす使命としたいのであります。

それから、此の槌の柄は彼の旅順陷落の要點たりし二百三高地に生せし木を鎖つたものであります。で、希くば主の御名に於ける忠勇の意味を味ひたいと思ひます。私の記憶にして誤なくば、此の堅城を圍む幾多の小岳の中獨り二百三高地は日本軍に因つて七度占領せられしも七度とも敵軍の回復する所となり八回目に之れを全ふして遂に難攻不落の旅順を奪つた、降將ステッセルが四百の幕僚と共に本國へ歸る時に恰度私は長崎に居ましたが、將軍は一通信員に語つて斯う云つたさうであります。「日本軍が二百三高地を占領し旅順の市中に十一吋砲彈が直下する樣になつては最早や萬事休すて予等は命數の盡きたるを知つたのだ」。

私は今日東洋に於ける傳導の二百三高地なる日本を諸君に捧げ度い。而して此の要害に主イエスの棚を築き以て東洋に肉迫せば業に其の命數は吾人の掌中に歸するのである。キリストの聖名は極東の天地に震ひ十字の旌旗翩翻として飜るを見るに至りましやう。私は實際此の槌の柄を作りし木の附近を徘徊致しました。此の要處の占領せられたのは十ヶ月も以前で、其の間には冬の雨や雪に洗はれ、夏の日光や風に晒されたのだが其の邊一帶には倘ほ破服血痕を留めて居りました此の激戰に參加したる日露兩軍の勇士は吾人をし吾儕の主イエス、キリストの爲めに一命を賭するてふ忠勇の氣を盛ならしむるのであります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

紫式部の理想の女性

秋　郎

平安朝の世、奢侈放漫に流れ、優柔不斷に傾き、櫻かざして消閑一日の行事としける頃、流石は文華燦然女性の典型源氏に顯はれて燗々たるぞうれしき。

紫式部一世の慧眼、よく時流を看破し、すべて物のうはべをこする風流韻事を卑しみ、浮きたる女性の心を咎め、女の漢學だてするを好まず、佛敎くさきを見苦しと見たり。思ふに平安朝の女性ほどしをやかなりしものなからむ。はたあてやかなりしものあらざらむ。浮草の何處を定めざる心も知られてあはれなるを、あかしさとしたる式部こそ誡後の世の鑑なりけれ。

そが想を尋ねんに、眉にほひやかに、心のどかなるものぞ女性の理想ならめ。されどさるものこの現世にあるべしやは。今は唯種姓にもよらじ、容貌をば更にもいはじ、いと口惜しく、ねぢけがましきおぼえだになくば、唯偏に物まめやかに、靜なる心のおもむきならんよるべをぞ、終のたのみ所には思ひ置くべかりけると云ひ、男だに才かりぬる人はいかにやと云ひ、思ひ込みあれがしなど勸めたる、また心に知れることをも知らず顏にもてなし、たゞ忠實にしとやかなる所だにあらば、足りなむと云へる、まこと美しの女性かな。

わが大和の國は實に優なる國、をみなの國なり。昔より言擧せぬ國と尊まれけるなり。如何に漢學と佛敎とが盛なりとも何かはせむ。學者ぶりなる人の徒に自ら高く持して、現し世の人に隔てがましきに至るなど女の最も忌むべき事とせり。知らざるを知らずとする儒敎の敎訓と佛敎の深慮と謙讓とが女たるべき身につかばよかるべきに、徒に名に奔り虚榮の具となり弄ばさるゝぞ悲しきと云へり。

さらば理想の女性とは、貞潔なる女なるか。然り、其處に尙ほ未だ情味の足らざるを覺ゆ。さらば柔和の一味か。然り、母としての慈悲心ゆたかなる女性即ちこれなり。この奧義より、貞潔も出で、淑雅も出で、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あらゆる忠實なる奉仕心も出づるなれ。要するに母としての人格のにほひとうるほひとだにあらばたるべき身ぞ。女は畢竟母らしかるべく、感情の惇化最もつとむべきに、今や其の本性は忘られて、句々の末技に齷齪たるぞいまはしけれ。

さまよへる聖者（承前3）

ヴァンダイク作
櫻　喬　生　譯

二、

さても、アルテーバンが日頃飼ひ慣らしたる幾多駿馬の中にても、ヴェスダこそは殊に逸物として彼が恩愛の情を一身に集めたる者なりけり。元より無心の畜類にしあなれば、貴き主人が旅出の意味をば深くは悟り得ざりしも、唯一念主人の厚き熱情をや宿しけむ、終夜眠りも得せず門出の鞍に身を固めて、寂しき厩の中に足掻きの爪音高く打ち鳴らしつゝ、一向に主人の姿をば待ち焦れたり。

東天曙光の匂ひも仄かにして、小鳥の力に滿ちたる淸き美しの歌聲も尚ほ樹影に深く潜むで發らず、果しなき荒野を包める白暗の薄霧未だ全く散せざる未明早天の裡を、閃く一念希望と憧憬の光に滿ち〳〵たるアルテーバンは、駿馬の脊にヒラリと飛び乘りさま坦々たる大道を西へ、彼處嶮崖聳え立つたるオロンツ山の麓をさして、ひたすらに駒の足をば急がせけり。

あはれ、此の果しなき長の旅路、主人と愛馬との間には如何に密邇たる和樂の風の通ひたりしぞ。嗟呼默然の裡、無限無量の愛の泉は溢れ〳〵て、言語以上筆致以上、主從の胸と胸との間を緊密なる友愛の鐵鎖をもて連ね終むぬ。

人馬聲なうして何時しか天摩巍峨たるオロンツ山の奥深く分け入れば、幽鳥仄かに妙音を送り、谿間に響く木玉の音の唯徒らに心の琴を打ち鳴らすのみ。喝しては谷の小川に口を濕し、一日の勞に疲れては人馬共に同じ樹陰の星に守られ、野營の夢に樂しき一夜を明かしては煕々たる旭日の美を歌ふ。飢えては一塊の麵

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

麪に對して主人は愛馬の頭を撫でいたわり、食事を共にし美味を分つ。昭光の翼東天に湧きて、温かに心地よき朝風顔面を拂ふや主人は驚き露營の夢より醒むれば、ヴェスダは既に樹影の下、足掻きの爪音高く打ち鳴らしつゝ今日の旅出を待ち顔なり。あはれ彼にして苟も邪教未信の輩ならざる以上、如何なる名目の下に神を求むるとも正しく此の無言にして無聲なる神の熱情に向て深く感謝の意を表すべきなり。否、此の無韻の一大恩寵に向て衷心感謝の誠をば捧ぐべきなり。アルテーバンは斯くて靜かなる晨の祈禱に於て二重の祝福を神に求むるを常とせり――おゝ神よ願くは此の憐れなる騎者と騎馬とを護らせ給ひ、時に嶮崖萬丈の峻坂より危き刹那の蹄を止め、生死危急の旅路の中に我が靈の安穩無事を圖りて、始終變らぬ大御心もて、我等主從の身の上に限りなき御惠みと御力とを與へしめ給へ――。

主從は斯くて身に沈み渡る晨の風に心の底を清め、燃るが如き行手の希望に照らされて――たゞすら空間を縮め距離を減して旅路の目的を果さんと――乘馬の力を量りつゝ一意駒の歩みを急がせたり。

もしや破にして定めの日時に同じマギー僧徒たる彼の三人の友と相合致するを得たりとせば、其は彼に取りては一大成功とも見るべき歟。蓋し彼處ボルシッパなるセプンスフィアの殿堂までは百五十餘里の雲水を隔て、彼等主從二人が如何に全力を盡したりとも、一日十五里以上の歩行は到底不可能と思はるれば也。然もアルテーバンは愛馬ヴェスダの能力が能く、是に耐ふることを確信して些の歎心なく日毎豫定の山路を辿りつゝ日夜兼行、一意行手の道をば急がせぬ。

今し彼は斷崖絶壁の間を馳せ行く幾多無數の急流を縫ふて、九十九折なすオロンツ山の細路を辿りぬ。

やがてニジアンスの平原を過れば、荒漠たる牧場の草を喜びつゝ幾百千と數知らぬ馬群、ヴェスダの影を見るや馬上の人をや恐れけむ、頭を上げ喧騷擾亂、蹄の音高く馳せ去りぬ。かして沼地の牧場よりは、數知らぬ小鳥の羽音高く一時に躍り上りつ、驚異の一聲後に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して何處ともなく姿を隱しぬ。

彼は又コンカバールの豐穰肥沃の野路を過ぎぬ。かして田家のほとりより立ち上る仕能の煙塵は、黄金色を張らして人影田家のすべてを包み　四百支柱を有するアスタルテの大殿堂も、爲に其が半身を埋沒せりとぞ見えし。

岩間を傳ふ涓々たる清水に濕され、此處豐穰なる御園の中なるバグヒスタンの一角、アルテーバンは暫し駒の手綱を弛めて頭上奇岩屹つ參差の體、今にも我身近く落ち來らむずオロンツ山の絶頂を見上げつ、彼の遁げ行く敵を脚下に踏まへ、意氣昇天のダライアス王が英姿、或は戰勝の傑るべき記録を永遠不滅なる斷崖の表面に高くも刻み付けたる樣を偲びて、思はず戰慄壯美の威に打たれては天地自然の大を謳歌せり。

羊腸寂寞たる通路の中に、惱める馬と葡行しつゝ風寒き山路の險を越し、或は又「吾れこそ野路の案内者」よと云はんヰりに眼前近く馳りつ流る小川の畔り、幾多陰暗たる山褄を下りて、蔦蔓木の實熟せる樹影、黄色なす石灰石の小屋散在する美し懷かしの谷間を過り或はキャリーンの樫の並木、ザクロスの陰々たる小門を過ぎて斷崖聳え立つたる城壁の中に入る。あるは又其の昔、サマリアの人々が囚はれ人となりて幾星霜を送りしと傳へたるキャラの舊都に入り、時に廣大の門地を出て四邊に周り立つたる山間を辿る。此の崇高壯美の中に立ちて、アルテーバンは何心なく前面聳え立つたる岩を仰ぎつ、一マギー高僧が幾多巡遊者の旅路の上に、豐けき祝福を乞ひ求むる姿とも見るべき合掌禮拜の像を認めぬ。おゝ如何に彼が胸の高潮せるぞ、如何に其の姿の清くして靜やかなるぞ！

此の狹き峽の入口を過くれば、一面生え繁る無果花桃の果園、其の間を縫ふてギンツの小川泡沫を散らしてさわ〳〵と流れ行く。廣き稻穗の一面は秋の收獲を望むもの丶如く絶首最後の御手の下るを待ち顏なり。

アルテーバンは今しも白楊酸果の繁れる樹影の下、丘陵の間を縫ひ行く流れに沿ひ下りつ、頓て茫漠たる一面の平野に出でけり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見渡せば切株殘る田圃、枯草荒寥の牧場を通して一條の大道箭の如く馳しれり。嘗てはバルシア國王の配下に立ち、歴山王が創設せるセルーシアの大首府たりしクテスフヲンの市街を見舞ひつ、チグリスの渦卷く流れ、沃野を濕すユーフラーツの數知らぬ支流を打ち渡り――アルテーバンはひたすらに駒の歩みを急がせつ、十日目の薄暮、城壁壞れ人荒びたるも尙昔ながらの面影を殘したるバビロンの城下にこそは着きにけり。」

さしもの駿馬ヴエスダも崎嶇たる羊腸險岨の旅路に疲れ果てゝ、見るから氣力消衰の有樣なり。此の門出にして若しや人並々の旅なりせば、愛情に深きアルテーバン、などて斯かる過勞無殘の旅路を續くべきや。彼は歡び進んでバビロンの城下に一夜の安息を求め人馬共に樂しき一日の平和を迎へしならむも、噫、今し彼は行手の急かるゝ身也。契りを定めし三人の友が我を待ち明かしつるセブンスフヰアの殿堂までは僅々三時間程には過ぎざるも、此の半夜迄に彼處殿堂に至らずは、友は約を履行せざるものとして我を見棄て去らむ。否、親しき、友と相携へてベツレヘムに主なる御顏を拜するの機會を逸せんは必定、おゝ我れ進まざるべからず、一刻の猶豫もなり難し。……此く心の臍を固めし彼はバビロンの城下を後にして、疲れし馬を勵ましつ、靜々と田間小路の闇路を辿りぬ。

棗椶櫚の木立蹲乎として、白黃色の流れの中に、陰暗たる小島を成せる所、ヴエスダは今し此の森に入りて俄かに其が歩みの足を緩めつ、注意に注意を加へて小暗き道を徐行しぬ。

遙か闇々たる行手の一端よりして、何物ともなく注意の號章落ち來るよと見へしが、馬は逸早くも一種不安の危險と困難とを嗅ぎ付けたらん如く――良馬の常として既に四邊に氣を配らせ何等か豫備をなせるものゝ如く見えぬ。

あたりの林地は死せるが如く寂寞の氣に溢れて、木の葉眠り小鳥潛み、闇々の氣おのづと胸裡に迫るの感あり。ベスタは頭を垂低れ、折々恐懼の嘆聲を發しつ除行せしが、遂に不安と恐懼との本體を見破りたらん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

如く、とある棕櫚の木陰、何物ともなく黒影蠢めくほとり忽然として蹄の音を止めぬ。

アルテーバンは急ぎ馬より飛び下りぬ。

折しも木陰より洩れ來る星のみ光朧ろに道邊を照らして路頭に横はれる一個の人影を示しぬ。

見れば穢れに染みたる衣裝、憔悴沈鬱なる顏面、是れぞまさしくバビロンの市邊當時猶も群棲せる猶太民族の一人なりとは知られたり。あはれ蒼白なる皮膚、羊皮紙の艶なきがごとき黄味を帶びたる姿、慥かに是れ沼地多き地方の秋分時に於て、流行猖獗を極むる極度の熱病に犯されたりとは、直様彼の胸中に思ひ浮べる事實なりき。おゝ冷かなる死出の朔風は既に彼が苦しき手中に向て吹き荒める也。アルテーバンは勉めて此の場を通り抜けんとせしが、其が可憐なる兩の腕は呼動なき胸上に力なく横はりぬ。

彼は憐憫の情禁する能はず、思はず後ふり返りしがおゝ彼の可憐の男の子！よしマギー教徒には是ぞ最も適切なる墳墓の地なりとは思へ、異郷他界の地に其が肉骸を横ふる憐れさ——噫、此の廣漠たる大地の墳墓時に鷹鳶の嘴に掛けられ、野獸猛虎の腸を肥やし、勝ち傲りたる彼等鳥獸は、こよなき美味の餌食を得て潜かに天の恩寵を謳歌せむ。おゝさるにても、彼等が其の美味に飽きたるの時、大地に殘るものとは抑や何物！？おゝ砂上狼籍繽紛たる凄慘の白骨に非ずや。

顧みれば消え入る如き此の世ならざる呻吟の聲は、病める男の子の唇より洩れて、血肉落ちし病者の手先きは、アルテーバンが上衣の裳裾シッカと摑みつ、一向に憐れみ助けを求め顏なり。彼が胸裡此の時しも疑懼恐怖の影は無きも、此の懇請に應じて危急の日時を無益に延ばすこととの心苦しうて、胸の呼動一時に亂れ心血喉元を壓せしかと疑はれぬ。

噫、行手の旅に心奪はれたる彼が身の、此の暗黒なる幔幕の中に如何にして未見なる病者の看護に危急の時を過ぐすべきぞ。彼が一念切なる憐憫の情も、噫、如何なる要求か未知未見の病子に有すべき！？もしや、アルテーバンにして一時間の猶豫をなさむか、定めの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時刻に於てボルシッパなるセブンスフキアの殿堂に達せんことと思ひも寄らず。さすれば其處に夜籠りして彼を待ちぬる三人の友は、必定規約を破りし者と見做して行手の方へ旅出せむ。嗟呼、彼や決して此處一分も猶豫ずべき秋に非ず！

さはれ彼にして此處を見捨てんか、病子の運命や果して如何。叉もし止まつて。介抱看護せんか、可憐の病子は一命を繋ぐべきも、彼の靈や破約罪の勃呵責を受けて、永遠不穩の渦中に沈まむ。噫、此の仁慈なる一行動を以て彼が信樂慈愛の大果を敢てすべきか、さりとも只一瞬時の業務なりせば此の憫れむべき瀕死の一病子の爲に、彼方清泉の樹陰に一杯の冷水を惠むべきか。心碎くる千々の胸、あゝ彼れや正に如何にかすべき!?

耐え兼ねしアルテーバンは心切なる祈りをあげぬ。

『おゝ、眞と淸との中にまします天なる神よ。此の可弱きあはれの肉身をば唯一意御心のまゝに全知の道に導き入れ給へ。希くば果なき肉の此身をば恙なく聖なる御道に入らしめ給へ！』

祈念を凝らしたる後、アルテーバンは病子の方へと馳せ寄りつゝ堅く握りつめたる雙手を釋かしめ、彼處なる棕櫚の葉凉しき小堤の方へと病子を運びぬ。

彼は急ぎ頭帕の口を解き、附近の泉に馳せて一杯の清水を掬び、熱に惱める病者の額と口とを濕しぬ。かくてアルテーバンは常に外出の折其が帶裡に藏めたる單純なる然も功驗著しき藥劑の一味を混し、血色なき病者の唇を開きて徐々に之を注入し——蓋しマギー教徒は占星をなすと同時に叉醫術を兼ね具へたりき——一意巧致熱心なる患者の治療者として力の限りを盡しぬ。數時の後病子は元氣を恢復し眼を開きて一心にアルデーンバンが顔を凝視めぬ。

男は終に田舍訛の言葉もて口を開きつ、

『御身はそも如何なる人にましますぞ。叉如何なれば此の身を此處に看護して、我が生命の紐をば繼がせ給ひしぞ…………』

アルデーバンさもこそと主肯きつ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『我は賤しきマギー敎徒の一人、アルデーバンとてエグバタナの一隅に住する身也。今し人類の救主として又猶太民族の王として、降誕ましませし主なる君を拜せんが爲に、遙々エルサレムに旅出せんと志すもの、行手の道の急がるゝまゝ實は一刻の猶豫も出來難き此の身。幸ひ持合したる藥味の一劑、麵麭と葡萄酒の少量と共に只今御身に餞せむ。御身もし力を恢復し給はゞ彼處バビロンの城下なる懷かし嬉しの家に還りて、妻子と幸を別ち給へ………さらば御身に幸多かれ………』

病子は感涙止めも得せず。高く嚴かなる天なる御空打ち仰ぎつゝ慄く雙手を合掌して、

『おゝ高き天上にましますアバラハム、イザクッ、ヤコブの御神よ、希くば友なる旅人の上に限りなき恩寵を授け給ひ、彼をして希待せる天の彼方に導き入らしめ給へ、さりながら憐れ果なき此の身、此一生の大慈恩に向て酬ゆべき一物なきを悲しむ。唯告ぐべき一事は御身が求め給ふメシヤはエルサレムにあらでベツレヘムに生れ給へる一事なり。おゝ在天の神よ、願くば此の憐れなる病子に對して無限の同情と友愛との誠を注ぎたる友の身の上に、大なる御惠みを下し給ふて、安らに恙なく目的の地に導かせ給へ………』

●●●●●●●●●●●

時は既に夜半を過ぎたり。

天上遙かに星光輝き、澄み渡れる一痕の月影は、いつしか彼處の森に傾きぬ。

アルテーバンは急ぎ手綱を取りて馬上に跨れば、暫しの休息を喜びたる愛馬ヴェスダは足音輕く寂として天地も眠る平野を過り、小川を渡り、飛ぶが如くに踏の足を早めぬ。

やがて定めの場所に着くや、東天紅彩を飾りて榮えある曙光は既に椰子の葉涼しき樹影の上にあり。アルテーバンはひたぶるに不安と疑懼との念に打たれて天摩凌雲のニムロッド山頂を見上げつ、駒もおどろにセブンスキアの殿堂に入りしが、あはれ目指す三人の友は影だにも見えざりけり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

赤に緑りに黄に紅に、さては青白の多様多種なる色彩もて染めなしたる壇上は、自然の巧緻なる御手によりて織り出されたらん如く、照り出る曙光の中、消え行く虹の橋の如く輝き渡れり。

アルテーバンは猶も駒の手綱を弛めず、山の四周を馳け廻りつゝ、馬より下りて急ぎ最高の壇に上り、遙か茫漠たる西雲の御空を打ち眺めぬ。

果しなき沼地は雲煙模糊の裡に消えて遙か砂漠の境地と相接せり。脚下に近く鷺鷲沼地の潴水に立ち、豺は低き藪地の邊りに半身を現しぬ。さはれ三人の友の姿は遠近隈なく眸を凝すと雖も、遂に一點の影だにも見せざりき。

不圖、傍を見れば、壇地の一隅、破片の錬瓦もて作りたる一塔あり、其が下に一片の札あり。アルテーバンは竦く胸を抑へて之を讀めば、

『我等は三更を過ぐる頃まで一向に御身の來るを待ちしが遂に果なき空頼みとなりぬ。されど我等は一刻も猶豫すべき身に非ず、已むなく處彼エルサレムに向て旅立す、御身若し後れて此の地に着かば彼方砂漠を越えて我等の跡を追ひ給へ……』

失望の氣胸に滿ちたるアルテーバンは頭を掩ふて現ともなく大地に伏し轉びぬ。

『おゝ糧食なく力なき此の身、山路の旅に疲勞し果てたる我が愛馬、あゝ如何にして此の荒漠たる砂漠の大地を橫り得べき…… さなり、我れバビロンの城市に還り我が青玉の一ッを賣却し駱駝の一隊を求めて旅路の用意をなさむ。元より薄弱疲勞の此の身、友なる三人に合隊せんこと萬に一つも覺束なし。さはれ仁と愛とに滿ちたる天なる神は、我が憧れ求むる主なる君に會ひまつるや否やを知り給はむ、おゝ聖にして聖なる神よ病子に對する一念我か愛憐の情を聞し召し給はゞ、我をして恙なく此の旅路を果して主なる御前に跪かしめ給へ！

折しも淸らなる朝風椰子の木陰を掃つて、美妙の樂の音は彼が耳朶を亂れ打ちぬ。

（第二節終り）《つゞく》

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子青年會記事

●會員諸姉に申上候

本會事務整理上又雜誌郵送上の必要有之候間會員諸氏及雜誌購讀者にて御轉居之節は必ず新御宿所御通知被下度懇願奉候

○女子學院青年會報告

女子青年會

さむさのせつ御一同樣御無事に御消光の御事と賀し奉り候。二月九日の萬國青年のための祈禱會には出席いたすはづの處いろ〳〵なる事情のために出席いたしかね候、されどもかげながらと存じ本會員一同には其夜七時より祈禱會をひらき申候御一處に集會いたすことを得ざりしためかもの淋しくは感じ申候へども會員はみな熱心にいのり申候。廣い世界に言葉も通はぬ青年のあまたが神の前には同じ祈をさゝぐる事のたのしさをみな感じ申候。新年以來本會もなか〳〵に盛會にむかひ申候。特に聖書研究會は面白くたのしみに皆勉强いたし居り候ヤコブ書をたゞ今は研究いたしをり候。

まづは右まで。

二月二十二日

女子學院青年會

○大坂ウ井ルミナ女學校青年會報告

祈禱日に於ける當青年會の祈禱會の模樣を左に御通知申上候

祈禱日なる二月九日は日曜日なる故に通學生は特別に此會の爲に出席する事むつかしくして會員一同連りて祈禱會を開く事能ばざれば、二月五日の水曜日に特別に祈禱日の祈禱會として會長深井だい子姉司會の下に祈禱會を開けり。然して二月九日の祈禱日には寄宿

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生一同集ひて中川姉司會せられて祈禱會を開けり。

二月五日

三百七十五番の讃美をもつて開會し、次で司會者の聖書路が十八章九―十まで朗讀及び開會の祈禱の後二名の姉妹熱心に祈られしが、時少なきをもつて初めに本科の五年生のもの一同祈り次に一組づゝ順次に祈禱せり。青山教頭の閉會祈禱をもつて會を閉づ。

二月九日祈禱日

第二百四十一番の讃美歌をもつて開會せり。次で司會者聖書ヤコブ書五章を朗讀せらる。又今日の祈禱日の來意を演べられて祈られし後三名の姉妹熱心に祈らる。

和田光枝姉は祈禱につきて所感をのべられ。次で西野先生熱心にすゝめをせられたり。

其大略

一、熱心なる祈禱を捧ぐべし正しき者の熱き祈禱はちからあるものなりとの聖句をおぼえて常に熱き新を捧ぐべし。

二、公衆の前に於て感話し或はすゝめたりする事をはばかりてなさゞる人あり、自分は人々に奬勵などする如き價値なき者として、これらの事をひかえる人あり、然れど天下に義人一人もなくして何人にも罪あり缺點あるものなるに、人々が悉く我は罪人なれば人々にすゝめをする價値なしとておのおのひかえたらんには我らいかで向上の途につく事を得んや然れば吾人に己が希望をのべんと思考して人々の前にて感ぜし所をのべたらんには他の人を益する事幾何なるか知られず。又それによりて己も大なる利益を受くるものなり。

此すゝめに感じてあふるゝばかりの熱誠をこめて多くの姉妹たちは祈られたり。各々非常なる熱心をもつて祈り居りしが故時間のたつ事をおぼえざりしが司會者時間過ぎし故、主の祈をなして閉會にせんとの言により一同主の祈をなして會を閉ぢたり。當日集會者六十四名なりしが非常に盛んなる祈禱會にして近來に見るあたはざる良き集會なりき。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大阪ウヰルミナ女學校

青年會書記

〇横濱共立女學校青年會情況

一月最終金曜日即ち三十一日に青年會大會を催して各部の情況を報せり。列席者八十七名。いまその次第を左に掲ぐべし。

一、讃美歌　二百七十七番
一、祈　禱
一、書記及會計報告
一、傳道部書記及會計報告
一、矯風部書記及會計報告
一、祈禱部會書記及會計報告
一、慈善部書記及會計報告
一、文學部書記及會計報告
一、讃美歌　四百二十八番
一、主の祈禱
以　上

なほ此度の入會者は十名あり。

〇名古屋女子青年會祈禱記事

二月九日（日曜日）東京に於て開かるゝ萬國青年學生の爲の祈りは當日一同集會の差支あるを以て本日に取越し祈禱を爲す。

明治四十一年二月三日（日曜日）女子青年會第一回祈禱會を聖使女學院内に於て午後四時開會す。讃美歌開會の祈りの後司會者牟田姉の馬可傳十一章二十四節「是故に我なんぢらに告げん凡そ祈禱の時その求ふ所のものは必す得べしと信せは必す得べし」の聖句を題とし祈りに關し最必要なる事につき演説あり。又各自の熱心なる祈りありて後讃美歌閉會の祈りを以て午後五時半閉會す。出席會員二十名なりき。

尙九日（日曜日）東京に開かるゝ萬國青年學生の爲聖使女學院内の者のみにて當日熱禱を捧ぐ。

明治四十一年二月十五日（土曜日）第三回女子青年會を聖使女學院内に於て四時開會す。讃美歌開會の祈り

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ありて當市ヨハネ教會牧師宇野秀太郎氏(當會顧問)より左の意義に付講話ありたり。

創世記二章(二十一節—二十三節)

二一、是に於てヱホバ神アダムを熟く睡らしめ睡りし時其肋骨の一をとり肉をもて其處を塡塞たまへり。二二、ヱホバ神アダムより取たる肋骨を以て女を成り之をアダムの所に携きたりたまへり。二三、アダム言けるは此こそわが骨の骨、わが肉の肉なれ。此は男より取たる者なれば之を女と名くべしと。

右の聖句を題とし、婦人の性質及責任並に婦人の三大特徴たる希望忍耐愛情に付ての注意及ひ之を完全に圓滿に發達せしむる爲イエスキリスト其能力を感受し完全なる成功の生涯を送るべき事。

次いで當地縣立高等女學校教諭大河内氏より武士道に付一條の講話ありたり。讃美歌閉會の祈を以て午後六時半閉會す。

當日の出席會員三十名(内新入會員四名)あり又出席會員に規則書を配布す。

▲花と人▼

花を愛せざる人には花は何等の感動をも與へないが花を愛することに依て、自分と花との間の先天的共通を開發した人には、花から出る色や形香の符合が媒介となつて其間に精神的交通が行はれるのである。

花が吾等の如く和樂の感情を抱いて居るや否やに就ては吾等の問ふ所ではない。吾等の方から花に接して其の美しい色形香りに依て幾分でも樂しみを感ずるならば其の限りに於て花は吾等と同じ感情を有つて居ると思ふ。さもなくば吾人が花に對する感情は空である。其の愛情は一の空想的妄想にすぎない。『山も海も空も川も皆我と我心の一部分で、又我は彼等の一部分ではあるまいか』といつたバイロンの名句は享樂にしても創作にしても吾等が美に打たれた時の感想である。…(姉崎博士「復活の曙光」四一—六二頁)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

次號豫告!!!

雜誌「明治の女子」生れて此に五星霜、其の間種々の困難と障害との道程を經過せしと雖も、幸に愈健かに愈美しく發達しつゝあるは、偏に之れ上帝無限の加護と讀者諸姉の溢れむばかりなる熱情とに依らずんばあらず。本誌元より紙數に制限あり。充分なる記事を揭くる能はざるも紙面の廣狹は必ずしも患ふる所に非ず。本誌は出來得る限り面目を改め內容の豐富を圖り、向後生鮮潑溂の氣を加へて諸姉修養の資料たらしめんとす、希くは倍舊の厚情を給へ!

次號揭載の分にて既に確定せるもの左の如し。

小供と宗敎……………………巖谷小波
題未定……………………エーシー、マクドナルド
水の姫君(承前)……………………辻村靖子
枕の草子を讀む……………………秋　郞
ルイ第十四世を論ず……………………福田市平
宗敎と生死の觀念……………………川副櫻喬

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

YOUNG WOMEN
OF
JAPAN

Vol. V. *March, 1908.* *No. 3.*

Miss M.A. Whitman, Chairman
Dr. Kei Okami, Vive-Chairman
Miss A.G. Lewis, Recording Secretary
Mrs. G.M. Fisher, Treasurer
Miss Michi Kawai, Active Member of the World's Committee
Miss Sumi Miyagawa, Corresponding Member of the World's Student Christian Federation

Resident Members
Miss Ume Tsuda
Mrs. Hatsu Watanabe
Miss A. B. West
Dr. Tomo Inouye
Miss Hama Hirano
Mrs. Hana Ibuka.
Mrs. Koharu Nakajima
Miss Uta Suzuki

Non-Resident Memebers
Miss K. Tristram, Osaka
Miss Michi Matsuda Kyoto
Mrs. G. S. Phelps, Kyoto
Miss E. M. Soper, Nagoya
Miss N. B. Gaines, Hiroshima
Miss L. Zurfluh, Sendai

Miss A. Caroline Macdonald,
General Secretary
Miss Stella C. Fisher,
Assistant Secretary

Headquarters:— 15 Dote Sanbancho, Kojimachi, Tokyo

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治四十一年三月十五日發行

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

YOUNG WOMEN OF JAPAN

Be strong in the Lord and in the
strength of His might.
Gal. 6 : 10.

Vol. V. *March, 1908.* *No. 3.*

CONTENTS

EDITORIAL:—

Random Thoughts .... Okyosei

INTERVIEW:—

Miss Helen Gould .... Miss Ume Tsuda

MISCELLANEOUS:—

Water Princess (continued) ....: Yasu Tsujimura

To the Warbler (Poem) .... Kanako

Address by V.W. Helm..Translated by I. Fukuda

Murasaki Shikibu's Thoughts on Womanhood ....
.... Akiro

The Other Wise Man continued .... VanDyke
Translated by Okyosei

ASSOCIATION NOTES:—

Reports.

東京神田美土代町二青年會印行

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA